

セカンドライフ

アベノミクスへの期待感による株価上昇を背景に、投資セミナーが盛んだ。老後資金が気になるシニアの関心も高い。だが、米国の資産運用会社「MRIインターナショナル」の事件のようにトラブルは後を絶たない。投資トラブルに詳しい弁護士 荒井哲朗さん―写真―に聞いた。

(三浦耕喜)



「銀行でさえ失敗する。個人が投資するなど非建設的。投資などしなくいい」。荒井さんは、昨今の投資ブームをスバツと斬り捨てた。「貯蓄から投資へ」など、無責任なスローガン。シニアに老後資金を吐き出させる「現代の金屋供出」といえる。

投資を始めるトラブルは数多い。MRIの事件では、日本の顧客の千三百億円が消えたとされる。昨年のAIJ投資顧問の事件でも、年金基金の千四百五十億円の大半が消えた。投資を勧めない理由について、荒井さんは「取引を判断する情報の収集で個人は圧倒的に不利だということ」と端的に説明した。「必要な情報が、適切に開示されているとは限らな

MR I 事件教訓に

い。こそをつく例も多い」

実際、MRIは財務局や顧客に虚偽の報告をした疑いが強い。AIJ事件でも、社長らは詐欺罪などで起訴された。

公表情報だけでも、機関投資家に追いつくには、常に経済情勢に神経をとがらせることになる。パソコンから目を離せず、海外市況が気になれば夜も寝られない。「常に動く数字にイライラして、しかもリスクを抱える。それが豊かな暮らしといえるでしょうか」

では、投資信託などプロに任せるやり方はどうか。荒井さんは、銀行系の証券会社で起きた実例を挙げた。

「加齢リスクだ。今は頭もはつきりしていても、判断能力はやがて衰える。そうなることも、手を引けなくなりズルズルと続けていて、老後の資金は守れるのだろうか」

投資は「少しでも得をしたい」と思ってしまうことが多い。だが、損する「何とか取り返そう」という意欲が湧きがち。負けが込むほど、大ばかちをする道理だ。

老後資金

守るなら貯蓄で十分

「そんな心理状態になると、詐欺にも引っかけやすくなる」と荒井さん。シニアの多くは、まとまった貯金があり、年金という確実な収入があり、ローンの済んだ不動産も持っている。年を取って判断能力が鈍り、でも投資に抵抗感がないとする。一体どうなるか。「高齢者の財産を狙う業者がはびこることは容易に想像できる」と言う。

シニアの投資 ここに気を付けて

FX 投資信託
CFD取引 商品先物
外貨定期預金 退職金ファンド
デリバティブ ロスカット

- 投資において個人は情報弱者である
- 証券会社や投資会社は客の利益を保証しない
- 判断能力が鈍る「加齢リスク」も考慮する

銀行が紹介した証券会社が、年金暮らしの八十一歳の男性にリスク性の高い投資信託を勧誘。男性は資産の大部分を投じた。だがその後、株価下落で元本割れが生じ、男性は三千万円を失った。

「銀行が仲介していれば、元本は保証されていると思ひ込むのは仕方がない。リスクを十分に説明しないことがあまりにも多い」と荒井さん。このケースは裁判になり、証券会社は約二千万円を払うよう判決が下された。

「こちらが損をしても、証券会社や投資会社は得を

することもある。顧客と共存共栄の関係にはない。それでも取引したいのなら、相手は自分を客とは思っていないつもりで」と荒井さん。そもそも、シニアには根本的なリスクがあるという。

「加齢リスクだ。今は頭もはつきりしていても、判断能力はやがて衰える。そうなることも、手を引けなくなりズルズルと続けていて、老後の資金は守れるのだろうか」

投資は「少しでも得をしたい」と思ってしまうことが多い。だが、損する「何とか取り返そう」という意欲が湧きがち。負けが込むほど、大ばかちをする道理だ。